

---

# だって俺の彼女だろ？

ねこの目

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

だつて俺の彼女だろ？

### 【Nコード】

N2286I

### 【作者名】

ねこの目

### 【あらすじ】

おそらく、この学校で1、2を争う不良君。

柴田経は、『眼鏡フェチ』

柴田は私、青山白に「眼鏡をかけてくれ」と頼まれる。当然断るのだが、こいつはいつまでも私に付きまとう気なんだろうね。でも、眼鏡なんてかけるわけない。私は両目Bだしさ。

## 柴田フリック（前書き）

小説は、ねこ・まさがお届けします。  
しばたフリック

## 柴田ブラック

柴田 経は、恐らくこの学校では1、2を争う不良だろう。下の名前の経が、『けい』と読むのか『きょう』と読むのかは全然分らない。

そんな柴田君が、どうして私に頭を下げなきゃいけないのか。まあ、大体はお願いに決まっているのだが、この1年過ぎ、一度も話したことはない私に、何をお願いするのか、と聞かれたら、もう何も答えたくない…。

「だから、眼鏡をかけてください…」  
「嫌です」

眼鏡をかけてください……。眼鏡を付けてくださいなら、まあどん引きせずに断るのだけれど、

「いや、あのですね柴田君。私別に目が悪いわけではないんですけど…むしろ両目Bで結構いいほうですね」

「ああ、そーじゃなくて…勘違いされたな。もしかしてどん引きしたか？」

「…うん、凄く。君みたいな不良君に声かけられるのもびっくりしたよ」

「……さつすが、学年トップ。答え方が生意気」

柴田君は笑いながら少し長めの金髪をかき上げた。  
私は少し考えた。

あ、そうか、やっぱり不良くんにしてみれば生意気過ぎたかもしれない。だけどどうだろうか、私にしてみれば不良君の方がよっぽど生意気だ。

「青山……下の名前は？」

「シロ」

「シロ？ …… 犬かお前」

「違うよ、股間辞書で殴るわよ。今はあまってカタカナ読みしたけど、色漢字で白<sup>しろ</sup>」

「青なのに、白か。微妙」

「けらけらと笑う柴田くんは、私の顔面近くでつばを飛ばしていた。なんて下品なのだろうか。」

「…… まあ、いいんだけど。」

「いいじゃない、青と白を混ぜたら水色だもん、可愛い色してんじヤン。そんなこと言ったら、君はどうなの？ その名前。お経のきようと読むのか、はたまた経験のけいと読むのか」

「…… うっせーな…お経のほうだよ…」

「ふーん、頭丸めちゃえば？」

「ああ？ てめえ、人が下手<sup>したて</sup>に出てたらいい気になりやがって。ふざけてんじゃねえぞ」

「…… 口が悪い。それが人に物を頼むときの態度？ …… まあいいけどさ、断るから」

「断んのかよっ?!」

「うん」

「当たり前的事だった。」

「いきなり『眼鏡かけてください』で、普通に逆切れされて、私のストレスはたまりまくりだ。」

「君、眼鏡ふえち？」

「んなっ?! てめえ、なんで知って! …… はう!」

「柴田経はとつさに口を抑えた。」

「自分で墓穴をほって、いい気味だった。」

「へえ…… なるほどね、じゃあ、2組の桃ちゃんに言えばいいじゃないの？ あのこは丁度眼鏡っ娘だし、いい雰囲気であるじゃない。おどおどメイド系？ 結構好きでしょ？」

「お…前なあ」

「『お前』じゃない、青山<sup>あおやましろ</sup>白ですよ。柴田<sup>しばたけい</sup>経君？」

「つ青山さん……！ あいつはだめだ、お前じゃなきゃできない」  
「あのね、眼鏡かけるくらい誰だってできるわよ、だけど、かけるのは私じゃない」

「俺、お前にしかやらせないからな」

「全然嬉しくない。ていうか、柴田君：いや、柴田。下校の時間くらい静かにさせてくんない？」

「そっか、お前クラスに友達いないもんなー」  
「……」

柴田は嫌な所をついてきた。

そう、私には友達が5人しかない。

その友達というのが、さっき言った桃ちゃん。

後は3組と5組の子。皆私のいる教室にはいない。

この毒舌と、学年トップと言う肩書きからして、周囲からはよく『近寄ってくんな、汚れるオーラ』が出て来ていると言われている。

私は勿論そんなのだしてる気はサラサラないのだが。

「じゃあ聞くけどさ、なんで私が眼鏡かけなきゃいけないの？」

「絶対可愛いから」

「だから嬉しくないって」

「いや、今のは理由2だ。補足だ。最大理由1を聞け」

「理由1は？」

「俺の彼女に」

「ストップ」

何か酷い事を言われそうな気がした。

私の今後の学校生活に、いや、人生に大に関わるような刺激の強い事。

「青山が言えつつつたんだろ」

「大体想像ついたので。お願いだから言わないで！」

それを言われたら、今日絶対勉強はかどらない。

私は精一杯の拒否を発動した。

「他の人に言つて。私には荷が重すぎる」

「お前は荷が重いで済むかも知れない…が！ お前の言う桃ちゃんや他の女には背中の上に大きな岩をのせてさらにその上にギネスにのっている巨漢をのせるくらい重すぎる！」

「ちよつと、それしぬじゃん！ 勝手に桃ちゃん死なせないでよ！」

「そう、そうなんだよ。死ぬからお前に頼んでんだよ！」

もう、馬鹿馬鹿しくしか思えない会話だった。

「だから俺の、」

「うわー、やめてー！」

必死に耳を強く抑えた。

だけど、柴田は深く息を吸い込んで、

「俺の彼女になってー！！！！！！」

近所に100回くらいのエコー。そして最後にカラスのあほらしい鳴き声。

私は絶望した。

「言つなつて言つたのに……」

「言わなきゃ何も始まんねーだろ」

「……断るからね」

「絶対付き合わせる、これ真面目だから」

真顔で言う柴田は、真面目にムカついた。私はそっぽをむいて歩きだす。

少し間があり、柴田も歩きだす。

「なんでついてくるのさ」

「家、知つとこーかなー…つて」

「不良なら不良らしく感で辿り着け!!」

一つ柴田の足に蹴りをいれる。痛くも痒くもないと言った風に平然とあるく柴田。

ていうか私、告白されてもどん引きしてんじゃん……。

「あんたなんか好きになんない」

「まだわかんねーだろ」

「あんた、真面目に私の事好きなの？」

「うん」

「なんで？」

「え、言うのかよ、ここで……」

「不良だろが、顔赤らめんな!!」

頭に一発の拳骨<sup>げんこつ</sup>。やはり痛くはないみたいだった。

髪の毛をぼりぼりと掻き、柴田は私に笑った。

「やっぱり、お前みたいに度胸ないと俺の彼女は勤まんねえわ」

その笑顔があまりにも綺麗で無邪気で、私はふいつと顔をそむけた。

「こんな私にそんな顔、反則。」

「彼女なんかになんないって……」

愛情スパイシー（前書き）

あいじょうスパイシー

## 愛情スパイシー

天候は曇りだった。

こんな真夏の夜に曇りなんて…雨が降ったら凄く蒸し暑いだろう。やっぱり私はなんて運が悪いんだろうか。

「やっぱり勉強はかどらない。頭ん中パーだ…」

柴田は私に告白した。

半ば強制的に。

全然嬉しくもないし、ときめかないし、でも、最後のあの笑い顔に、照れの意味で少し放心状態になったのは本当。

「……ふう」

なんなんだ、あの男。

馬鹿な不良<sup>ヤンキー</sup>。私なんかに告白しちゃって。

「馬鹿な奴……」

シャープペンを置き、ベッドに寝転がる。今日一日の疲れが、とれてるような気もしない。

明日からは土日休みで、来週の木曜日が学力テスト。

なんか、柴田に振り回される気がするよ……。

うん、まあ、もう振り回されてるんだけど。

あー、なんか疲れたなー。

最悪な一日。

\*

「うー……」

五月蠅い。五月と縄の『糸』を『虫』と書き換えて、うるさい、だ。

「うあー……」

「苦しい。誰かに乗っかられているような。」

「がー……重い……」

「じゃ、起きろよ」

「つぬ?!」

「聞き覚えのあるようなないような声。」

「……ああ、目え開けたくない。」

「……誰デスカ?」

「目を開けずに、まずは質問。」

「あ? そんなん決まってるだろ」

「ぐいっと、まぶた瞼を親指の平で持ちあげられる。」

「痛った……!! ちょ、何すんのよ?!」

「……いい目覚ましになっただろ。しかも俺の顔も見れるし、……」

「石三鳥? じゃん」

「目が痛い、重い、苦しい。逆の意味で一石三鳥よ……。ていうか

「……今日土曜でしょ?」

「うん、だから。俺とデートして」

「やだ。あ、てかどうやって家入ったのよ、泥棒! まず私あんな

「の彼女でも友達でもないただのクラスメートだから! 帰って!」

「あ、間違った。『して』じゃない『しろ』だ」

「え、何。命令系?! なんつー俺様」

「相変わらずの、私にまたがる柴田という格好。俺様ボケの突っ込

「みに、重さと苦しさを忘れる所だった!

「すぐさま腕に力をいっぱいいれ、後方に押した。観念したのか、

「柴田はゆっくりと私の上を下りた。」

「ふん、強情な性格だ」

「あんた人の事言えないでしょ」

「いーんだよ、俺は」

「何が良いんだか。」

「……とにかく、今日は起きて朝ごはん食べたなら勉強なの。悪いけど帰って」

「無理、じゃあ俺もここで勉強する」

「それこそ無理、独学で頑張んなさい」

「はあ……」

柴田は溜め息を吐きながら、浮かない顔をしてあたりを見回している。

「大体、インターホンなんか聞こえなかったよ？」

「あたりまえじゃん、窓から入ったんだから」

「はあ?! それ不法侵入なんですけど!」

駄目だ不良は。

常識が通用する相手じゃない。

「おい、青山」

振り向くと、柴田が何かを見つけたのがわかった。

「何?」

「これ誰」

昨日やさつきとは違う、低い声。何かに怒ってる?

そして、柴田が手にしたもの。

目に映る、四角い写真立て。中には私と、一人の男。

みられた。

「青山?」

体がだんだん放心状態に近づいてくる。

だめ、体の動きを止める前に、一つやらなきゃいけない事がある  
だろ?

柴田の手から、写真を奪え。これは、誰にも見られちゃいけない  
ものだよ。

「っ……!!」

足が重たい、だけど! これだけは……。

「返してっ!!」

駄目なんだ。

秘密ピクチャー（前書き）

ひみつピクチャー

## 秘密ピクチャー

「返してっ!」

部屋に、私の声が響いた。

「青山?」

もうこれはプライドとか、そんなものは言ってられない。  
羞恥心が込み上げた。

膝がかくんとなり、床に座り込む。

ハツとしたが、もう弁解の余地はなかった。

「いや、あの……これは……」

「……何隠してんの?」

「あんたに……関係ないしょ……」

「関係大有りだ」

こいつは、女の気持ちがわからない。

「お前は俺の彼女になる女だ。俺への隠し事はありません」

「ちよつと、勝手に決めないでよ。私、あんたの彼女なんかになんないっていつてるでしょ。それに、あんたも、誰にだって秘密にしたいことあるでしょ? 人好きになつた事ないの?」

「ある、お前だけ」

「気持ち悪い事いわないでよ」

「こいつ、元彼?」

私の抱える写真を指差し、目を細める。

「……ちがう……」

すかさず、…否定。

「兄」

「…ちがう」

「ドンピシャか」

「違うつてんでしょ?!」

こいつ、狼みたいだ。

どこでも構わず辺りを探って、獲物を見つけると、目を細めてその時をジツとまつ。

なんで、そうやって当てちゃうかな。

「ああ、そのリアクションからして、元彼も当たってるな」

「なんで…」

「なんでわかるかって？ 俺は天才の秀才だから」

「…意味わかんない」

「……近親相姦？ 実兄か」

「だから何よ、悪い？ 好きだったの、本当の兄妹だって、好きなものは好きなんだからしょうがないじゃん！ 親にばれて、お母さんが泣いて、兄ちゃんも泣いて、…勝手に一人暮らしさせられて…でもまだ好きなのよ…あんたにこの気持ちわかる？ 親が泣いて、好きな人が泣いて、この苦しい気持ち、あんたに分かる?!」

何言つてんだ私。

八つ当たりなんて格好悪い。しかもそのあいて柴田なんて……。

「分かんない、」

「そーだよ。あんたなんかにわかってたまるか!!」

「お前の兄。なんでお前連れてでも逃げなかったのか」

「はあ？」

予想外の一言。いや、吃驚びっくりというか、この際引き気味。

「こんな良い女振って、……お前の兄、今度一発殴りたい」

「ちょ、やめてよ！ 勝手に私の兄ちゃん殴らないでよ!」

振り向いたその先に、柴田の少し切れている顔に、私は思った。

「柴田、本当私の事好きなんだね」

「あ？ 当たり前だろ？ 俺以外にお前をこんだけ好きな奴いない」

「……」

あ、真面目な顔。ちょっと照れる。

顔を赤く染めた私に柴田が、

「泣くか？」

なんて少し優しい声で、私に聞いた。

ここでうん、なんか言える訳ないし、ムカツク。柴田の前なんかで泣きたくない。

「誰が泣くかつ」

私は大いに拒否した。

「ふはっ、」

こういう拒否を待っていたかのように、柴田は馬鹿にするように笑いを噴く。

「笑うな！」

そんな柴田が、また私にはムカついて……。

だから笑った次に頭を撫でられて、私は子供扱いされたみたいに見える、それもまたムカついた。

「撫でるなー！」

「無理な話しだ、お前、可愛すぎ」

クールで優等生で人を寄せ付けない私が、柴田の目の前にはいなかった。

柴田経は、校内で1、2を争う不良君。私の前では、ストーカー極まりない超変人。狼みたいな人間。

自称、天才の秀才。

## 禁断メモリーズ

私はこの話しを進めて行く上で、一人、絶対に話してはおかないといけない人物がいる。

青山群真。群青色のぐんに、真実のしんをとって、群真ぐんまと読む。  
青山群真あおやまぐんま。

青山と読める字が出ている時点で気付いていると思うが、私のお兄ちゃん。My Brotherだ。

言いつらいからこそはつきり言うが、私は群真と近親相姦きんしんそうかんをしていた。

No Joke .冗談抜き。

群真と私は、2歳違いの血の繋がった本当の兄妹だった。

好意をもち始めたのは私の方。

もともとお兄ちゃん子だった私は、すぐにアピール攻撃祭を開催した。結果は成功で、すぐに群真は私を好きになった。

私を求めた。毎日群真のベッドで事に及んだ。

だけど、私が中学3年生、群真が専門校2年の時、親にばれてしまった。

いつかわ終止符を打つつもりだったのだろうか。

群真は何も言わなかった。だから私も言わなかった。

親が泣こうが喚わめこうが、群真が泣いていようが。

全てにおいて、私はそっぽをむいた。

だからこそこの性格が出来てしまったのか。今となっては苦しい思い出だ。

「……」

高校に入り一人暮らしを始めて進級し、私はこの頃よく郡真を思い出す。郡真どころか、私や郡真を避けていた母や父も思い出す。

今頃何をしているのか、元気にやっているのか、彼女はできただ

ろうか……私を忘れたらろうか？

「……郡真」

元旦には年賀状、誕生日には手紙が届く。  
元気か？

とか、勉強がんばれだとか、明けておめでとう。

あの近親相姦の日々の事には一切触れない文章に、私は悲しくなる。勿論年賀状は書かないし、手紙も返さない。

自分的には、良いことなのかもしれない。あの日きっぱり終わらせた関係を、また引き戻したくなるし、このまま違う人を好きになるかもしれない。

だけど、現実はそんなに甘くないのだ。

こんなにも、こんなにもまだ群真を好きでいる。顔を見なくなっ  
てからもう1年過ぎたのに。

「写真置いておくのも駄目なのか……」

ふと見つめる先に群真の笑顔。

あの時は楽しかった。無邪気に楽しんだものだ。

「あ、スーパー行かなきゃ」

何にせよ、早く群真を忘れる事だ。この恋心も、いつそ顔なんか  
も忘れちゃえばいい。

そしたらその後にあるのは、紛れも無い『幸せ』なのだ。

だけど、あいつは、柴田経だけは駄目だ。

あいつは不良だ。

そんな奴と付き合えば、私の勉強の賜物たまもの、授業費・教材費全額免  
除がなくなってしまうかもしれない。

しかも、狙っている大学特別枠も無しかもしれないし、……そんな  
ことになれば、この妙に充実している暮らしがなくなる。

不良は駄目。

…でも、不良と付き合うつて事を逆からみたら、私、変わるかもしれないって事？

不良とつるむ事で、私のお固い感じのオーラが剥がれるかも？

もつと世界が楽しく感じられるのかな？

まあ、何にせよ。

少し考えて置こうと思う。

## フレンド乙女

「ええっ?! 柴田君って眼鏡フェチなの?」

「うんだから、桃ちゃん推薦しといたよ?」

「やめてよ青山ちゃん! 私の身が危険だよ」

レンズをきらんと光らせながら、額に汗を浮かばせ、自分自身の身を必死に守ろうとしている女の子っていうか、乙女ちゃん。

「でも青山ちゃん、よく普通に接せられるね? やっぱりあれかな

? 学校で1、2を争う優等生と、学校で1、2を争う不良とでは、気が合うっていうか波長が合うのかな?」

少し嫌味じみて、でも物凄く可愛らしく微笑み私に質問をぶつけてくるこの娘。

2組の桃ちゃん事、北島きたしま桃ももである。

「わからないけど、なんか普通にしゃべられるのよねえ……不思議だわ」

本当に不思議な事ばかりだ。

「ああでも、私もちよつとわかるかも。柴田君そういうマニアック系好きそうだし」

「そついう……?」

「プライドの高い大人系。恋愛より仕事をとるような」  
「……」

本当に嫌味っぽい事を言うものだ。ていうかそれもそうだろう。こういう性格なんだもの、仕方ない。

「今度、私にも柴田君紹介してね? ちゃあんと付き合ってから」  
「だから付き合わないよ」

桃ちゃんは立ち上がって、私に眩しく笑いかけた。じゃあねといながら、桃ちゃんは席を立つと、教室から出て行った。

柴田は、学校には来ていなかった。

まあね、アイツは魔性の不良君だし、別にアイツが休んだって私

には全くといって関係のない話し。

早めに縁を切って、アイツを諦めさせて、静かに過ごして単位をとって、大学推薦をとって、学費免除。大学に通いながらバイトでもして、それからの計画でもたてて、親とも関係を切るって言う計画だ。

「……………」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2286i/>

---

だって俺の彼女だろ？

2010年10月28日04時56分発行